

世界トップレベル研究拠点プログラム

柳沢教授をリーダーに新拠点

文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」に、本学が提案した「国際統合睡眠医学研究機構」が採択された...

睡眠の謎解明を目指す

睡眠は誰でも知っている身近な現象だが、その基本原理は不明な点が多い...

石山智明 研究者ら

「京」を用いて宇宙の成り立ちをシミュレーションする計算を非常に効率的に行なった業績で...

ゴードン・ベル賞受賞する

スーパーコンピュータ「京」の高速計算が評価された。同賞は毎年行われるスパコンの国際会議で...

グローバルリーダー養成シンポジウム 博士人材の育成を議論 大学と企業の協力強化を

11月7日に大学会館の国際会議室で行われた。本学のグローバルリーダーキャリア開発ネットワーク...

青木教授らがつくば賞を受賞

原子核物理の新境地へ迫る



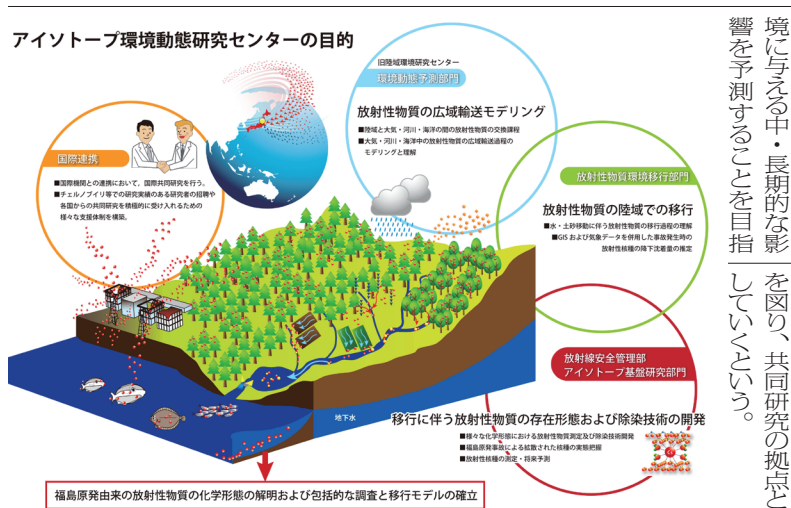
授賞式に臨む研究チーム(左から2番目が青木教授)

第23回つくば賞の授賞式、受賞記念講演会が10月17日(つくば市竹園)で開催された...

核力とは、原子核の中に陽子と中性子を閉じ込めている力のこと。陽子と中性子の間に「中間子」という粒子をやりとりすることによって力を伝達すること...

放射線物質の拡散過程を研究 共同研究の拠点へ

アイソトープ環境動態研究センターが、12月1日に発足した。同センターは、放射性同位元素などに関する研究や教育を行っている...



また、今後は福島大学環境放射能研究所との連携、海外からの研究者との積極的な受け入れなどの国際協力を図り、共同研究の拠点としていくという。

試では、複数の選択肢から一つ選ぶ問題で正答が二つあった。この問題に対してはいずれを選んでも正答として採点された。

大学院入試で 出題ミス

本学は2013年度大学院入試試験(10月期)で2件の出題ミスがあったと、10月29日に公表した。

万引き続発 処分を検討へ

本学が万引きを、警察に引き渡される事件が続いている。

また、10月19日にも同じ店舗で同様の事件が起こるなど、これらを含め計3件の万引き未遂事件が報告されており、いずれも処分内容は検討中だという。

野間口氏は「グローバル人材の育成・活用」という表題で講演を行った。「年齢や性別に関係なく、有能な人材を活用していく時代になった」と語り、院生らを産総研の職員として研修させることについて、彼らが自身の能力と目標を発見していることを語った。



講演する産総研の野間口氏

「拳公開!」働く職員さん特集

私たちのキャンパスライフは、多くの大学職員の手によって支えられている。しかし彼らが普段どのような仕事をしているのかは、意外と知られていない。今回は「職員さん」の仕事にスポットを当てた。(鈴木かおる、望月麗二比較文化学類 原啓一郎社会学類)

関わる

学生生活課

大学へ登校し、自動販売機で飲み物を買ひ、食堂で昼食をとる。放課後はサークル活動を楽しめ、学生宿舎へ帰る。こんな何気ない学生生活のほとんどが、学生生活課と関わっている。



違法駐輪の警告札を付ける学生生活課職員

大学へ登校し、自動販売機で飲み物を買ひ、食堂で昼食をとる。放課後はサークル活動を楽しめ、学生宿舎へ帰る。こんな何気ない学生生活のほとんどが、学生生活課と関わっている。特に力を入れているのは、学生の事件・事故に24時間対応できる体制を整え、何かあれば夜や休日でも駆けつける。「小学校3年生の娘は最近まで、私が警察の仕事をしている人だと思っていたようです」と学生生活課専門員の土下さん。学生が事故で亡くなるなど、悲しい事例をたくさん見てきた職員だからこそ「安全・安心」の大切さを意識している。土下さんは「学生が安

「学生が安全・安心して過ごせる環境のサポート。新人生への教養案内や駐輪指導をするため、4月は毎朝駐輪場に立ち、指導を行っている。学生宿舎担当の職員は頻繁に、非常口の点検のため、自主的に学生宿舎を見回すという。すべては学生の安全のために行われている。学生の事件・事故に24時間対応できる体制を整え、何かあれば夜や休日でも駆けつける。「小学校3年生の娘は最近まで、私が警察の仕事をしている人だと思っていたようです」と学生生活課専門員の土下さん。学生が事故で亡くなるなど、悲しい事例をたくさん見てきた職員だからこそ「安全・安心」の大切さを意識している。土下さんは「学生が安

安全な生活をサポート

全に学生生活を送るための仕事なので頑張ることができると語る。普段の学生へのサービス向上も欠かせない。今年に於いて、学生生活課の事務室の配置が変わった。以前の配置では、入ったすぐ窓口がどこか分からず、職員が横を向いて仕事をしていたため、訪れた学生が話しかけづらいという問題があったからだ。現在は、入ったすぐに銀行のようなカウンターがあり、数人の職員が常にカウンターを向き、入ってきた学生にすぐに対応できるようになった。学生に近い

就職課

就職課は、教員組織のキャリア支援と協力し、学生のサポートやイベント運営を行う部署だ。短期的な就職活動だけでなく、入学時から就職までの長期的な「キャリア」の積み重ねを支援している。

「学生とともに活動する」

就職課は、3人の学生から結婚式に呼ばれて、「時代や社会の状況によって就職をめぐる環境は違ってくる。就職課は学生と強いつながりをもつ部署だからこそ、長い時間をかけて継続的にサポートしていきたい」と語る。就職課の職員は、これまで学生の相談に応じたり、企業の担当者や関係者との連携を図りながら、学生の就職活動をサポートしてきた。就職課は、これまで学生の相談に応じたり、企業の担当者や関係者との連携を図りながら、学生の就職活動をサポートしてきた。



学生の相談に応じる就職課職員

就職課の職員は、これまで学生の相談に応じたり、企業の担当者や関係者との連携を図りながら、学生の就職活動をサポートしてきた。就職課は、これまで学生の相談に応じたり、企業の担当者や関係者との連携を図りながら、学生の就職活動をサポートしてきた。

伝える

広報室

「学内のさまざまな情報を迅速に、的確に公開し、筑波大学の魅力を知ってもらうことが私たちの仕事」と語る広報室長の大日向正人さん。「筑波大学」を広く知ってもらうために、本報室はどのような仕事をしているのだろうか。

「大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して伝えている」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関など幅広い。大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して伝えている」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関など幅広い。大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して伝えている」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関など幅広い。

発信の対象は、主に学内関係者への取材対応など、広報室の仕事はさまざま。2010年度から始まったランディングプロジェクトの統括や、キャンパスツアー、大学行事の記録まで幅広い。

「大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して伝えている」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関など幅広い。大学の将来構想から、学内に生息する動物などの身近な話題まで、これらの媒体を通して伝えている」と大日向さん。伝える対象は本学生や教職員、受験生や本学生の父兄、研究機関など幅広い。

支える

教育推進課

学生なら誰でも気になるのが成績や履修のことだ。私たちの学習環境は日々どのようなように管理されているのか。そんな本学の教育に携わる教育推進課の仕事を、同課長の平松昌弥さんに話を聞いた。

「すべての学生に学習の不利が生じないよう注意する必要がある」と平松さん。T

「すべての学生に学習の不利が生じないよう注意する必要がある」と平松さん。T

「すべての学生に学習の不利が生じないよう注意する必要がある」と平松さん。T

「すべての学生に学習の不利が生じないよう注意する必要がある」と平松さん。T

「筑波大学」の魅力を発信

「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

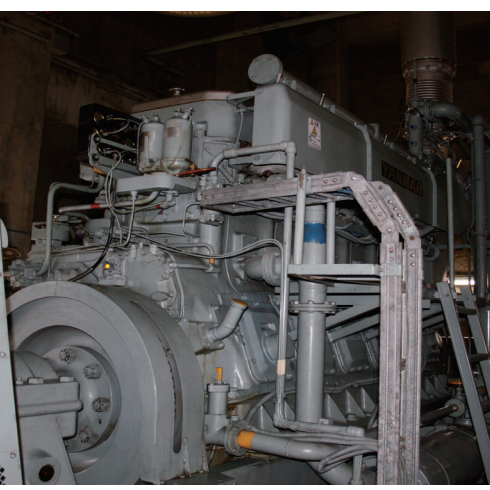
「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

「筑波大学」という名前を国内外に発信していきたくて、大日向さんは「社会と大学の仲人」として、彼らは今日も本学の声を届けている。

建物の大黒柱



中央機械室にある発電装置

「建物の生みの親」だ。筑波キャンパスだけではなく、附属学校や研究所などの建物や研究所などの建物の管理も行う。仕事の範囲が広いので、本大震災の時はこちらが使った。ホームページに送った「ホームページ」を素早く情報掲載でき、本館棟で緊急時対応ができた。また、今後も多くの建物を改修する予定だ。未改修の学生宿舎や、空調設備の不具合がある建物など、施設部はこれからも大忙し。それでも「建物を作って使っている人が喜ぶのを見るのが一番嬉しい」と笑顔を見せる松崎さん。私達の快適なキャンパスライフには、施設部という「縁の下」の力持ちが欠かせない。

また、今後も多くの建物を改修する予定だ。未改修の学生宿舎や、空調設備の不具合がある建物など、施設部はこれからも大忙し。それでも「建物を作って使っている人が喜ぶのを見るのが一番嬉しい」と笑顔を見せる松崎さん。私達の快適なキャンパスライフには、施設部という「縁の下」の力持ちが欠かせない。

反射鏡

万能食品お米の 素晴らしさ

中村雄太(人文1年)

みなさんにはどのような相棒があるだろうか。人間、ペット、植物、無機物など、そんなものはそれぞれであらう。相棒なんて個人個人のライフスタイルや性癖によって異なるものだ。だから、これから私が書く相棒に関する文章も一個人の戯言だと思って読んで欲しい。

そもそも、相棒とはその昔、かきを同時に持つて仕

事を共にするものという意味に由来している。このことから考えたとき私の相棒は「白米」、すなわち「米」の一択であった。なぜなら、私は彼に何度も助けられて

いるからだ。

彼は非常に優秀である。ちょっと水道で洗ってや

り、炊飯器という名の文明

の利器に放り込んでやれば

食料になるのである。冷凍

すれば保存もできるし、ア

レンジも可能、そして何よ

うおいしい。なくなっても

か言われそうなのでいくつか言っておくが、パンは確かにうまい。私だって食べる。しかし、私にはお金がない。お金がない、そのうえ主食で相棒の米が手に入るのにパンを食べる理由が見つかからない。パンは長期間の保存はできないし、レンジも何か別の食材が必要でお金がかかる。それに比べれば、塩があればおいしく食することができる米を私は推奨せざるを得ない。

結局のところ、私の如何にお米が素晴らしいかというところをつらつらと書いた

今月のテーマ



我が相棒

相棒との別れは 自立の始まり

ジョン・ブレイク(P.N)

水谷豊が成宮寛貴を新たな相棒にして久しいが、さ

お題は「我が相棒」である。あえて言うならば、平砂食堂である。別に食堂の回し者でもないし、ふざけているわけでもない。筑波大学に入学して以来、僕は自炊をまったく言っていない。横着者でも、ゆとりでもものしりでもらって構わない。だが、自炊をしない「同志」は意外といつた出来合いのものを買うのだが、平砂食堂を選択する者は数少ない。サークル活

次号のテーマは 「受験期の思い出」です

先 TEL 029-853-6999
e-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

記者の 声



梅野なぎさ

基本的には単一民族・単一言語国家とされる日本は今、その転換期を迎えつつある。法務省によると日本の外国人登録者数はここ10年で約20万人増加。政府も人口減少対策の一環で、外国人受け入れ方法を検討していくという。だが様々な言語や習慣、価値観を持つ外国人といかに共生するかという問題は、まだ解決されていないと思う。

私は小笠原出身だ。そこでは今でも、欧米や太平洋諸国を先祖にもつ島民が暮らしている。彼らは一目ですぐわかるし、戸籍上カタカナの名人も多い。だが彼らが異民族として別視されることはまず、ない。小笠原島民として普通に暮らしているのだ。日本人が多くの外国人を受け入れる

理由として「単一民族国家」として歩んできた日本の歴史を指摘する。日本には移民受け入れの成功談も失敗談もない。だから、異なる民族や文化といかに共生す



多文化社会の島に学ぶ

だが彼らは特別な存在ではなかった。高校の同級生も6分の1が欧米系の子孫だったが、違いといえば彼らが日曜日には必ず教会に行くことくらいだ。島の郷土芸能や料理にも多くの外国文化が混在している。ハロウィンなどの西洋行事も島全体で行った。多文化が入り混じる島社会は島民にとって当たり前だった。

このように小笠原では、何世紀以上も前から独特の多文化社会が成立してきた。欧米系などの島民は幾度となく国籍が変わったが、彼らは言語や

文化など日本的な要素を自分なりに合う形に変化させ、適応させ、日本人側もそれに応じた。そして今は皆「小笠原島民」としてアイデンティティを確立させている。

日本が移民受け入れを進める際の課題は、彼らの多様性がいかに対応してきたように小笠原はすでにそれを経験している。にもかかわらず、沖縄などの他地域に比べると、小笠原社会に関する学術的研究は圧倒的に少ないように思う。異なる人種の共存社会が構築されてきたその過程を考察することは、日本の行く末を見守るための一助になるはずだ。

筑波大学 出版会

新刊案内

現代人のための統合科学

「ビッグバンから生物多様性まで」

小笠原正明、新井一郎、澤村京一、杉田倫明、守橋健二 編著

現代人のための統合科学

Integrated Science for Students of Today
From the Big Bang to Biological Diversity

現代人のための統合科学

ビッグバンから生物多様性まで

小笠原正明、新井一郎、澤村京一、杉田倫明、守橋健二 編著

現代人は、そのときどきの興味と関心と必要に基づいて科学的知識を手に入れることができるが、自己流の学び方ではどうしても偏るし時間もかかる。スポーツと同じで、初心者の中にはちゃんと専門家から手ほどきを受けておいた方が後のためにはよい。本書はその「学び」のために、諸科学が紡ぎ出した糸で編んだ連続的な網としての現代科学の成果を、本学の教員18名がわかりやすく俯瞰して書いた現代科学のハンドブックである。

練習問題や基本的な用語の解説、科学における発明・発見の歴史年表が含まれており、大学の教科書としても、また一般の読者や座右の書としても有益な一冊。A5判並製、約400頁、3500円十税。

Doiworkクリスマスライブ

筑波大学アカペラサークルDoiworkクリスマスライブ2012が12月15日(土)に、つくばカピオ(つくば市竹園)で行われる。

チケットは前売り・取り置き500円、当日600円。小学生以下は無料。当日、宣伝用フライヤーを持参すると500円。17時30分開場、18時開演。

問い合わせ = xmaslive2012@gmail.com

応援部 WINS 単独講演「桐華祭」

筑波大学応援部 WINS の単独公演第2回「桐華祭」が12月21日(金)に、つくばカピオ(つくば市竹園)で行われる。演目は「筑波大学応援歌」「学生歌」「常陸野の」「野球応援メドレー」など。

入場料は無料。18時30分開場、19時開演。

問い合わせ = wins_tsukuba_cheer@yahoo.co.jp

理数学生応援プロジェクト

文部科学省による「理数学生応援プロジェクト」の一環として本学で行われている、理工農系の学類生の研究活動を支援する「先導的研究者体験プログラム」の参加学生による成果発表会が、2013年1月21日(月)に行われる。会場は3A204、3A207、3A209教室。10時から17時まで。

問い合わせ = ARBApplication@ac.it.tsukuba.ac.jp (川勝)

ロンドン五輪・パラリンピックトークショー 大舞台での秘話を語る



トークショーに出席した福見(左)と杉本(右)

2500人の来場者で大盛況

「London2012」が、10月31日に大学会館ホールで開催された。会場には学内外から約2500人が訪れ、ロンドン五輪やパラリンピックに出場した本学関係者6人が大会の感想などを話した。

トークショーに出席したのは、ロンドン五輪柔道男子60kg級で銀メダルを獲得した平岡拓晃選手(了徳寺学園職・体育2年)、女子78kg超級で銀メダルを獲得した杉本美香選手(コマツ・平成18年度体育専門学群卒)、女子78kg級の緒方亜香里選手(体専4年)、女子48kg級の福見友子選手(了徳寺学園職・平成21年度体育修了)、パラリンピックに出場した水泳の山田拓

朗選手(体専3年)、陸上競技の鈴木徹選手(平成15年度体育専門学群卒)ら6人。岡田弘隆准教授(体育系)が総合司会、山口香准教授(体育系)がトークショーの司会を務めた。

平岡は試合直前の体重の計量で、規定より100gオーバーしていた秘話を明かした。ガムを噛んで液を出したり歩き回って汗をかくなどして、計量を60gちょうどで切り抜けたという。また緒方は選手村や会場でハンマー投げの室伏広治選手や、陸上のウサイン・ボルト選手を見かけたエピソードを語った。「選手村には有名な人がたくさんいた。室伏さんは気さくに話しかけてくれる、男前な人だった」と語り、会場を盛り上げた。

パラリンピック競泳男子50m自由形で4位に入賞した山田は「自分の中では一番良いレースだったが、メダルの有無には大きな差がある。4年後には必ずメダルを取りたい」と再挑戦を誓った。

トークショーの最後には来場者らが「本学の経験はどのように活かされたか」と質問。福見は「同じ教室に一流の選手がいて、教えてくれる先生も一流だから、意識を高めることができる」と答えた。また「競技場が24時間使える便利さに卒業してから気付いた」と鈴木は語った。

「London2012」が、10月31日に大学会館ホールで開催された。会場には学内外から約2500人が訪れ、ロンドン五輪やパラリンピックに出場した本学関係者6人が大会の感想などを話した。

平岡は試合直前の体重の計量で、規定より100gオーバーしていた秘話を明かした。ガムを噛んで液を出したり歩き回って汗をかくなどして、計量を60gちょうどで切り抜けたという。また緒方は選手村や会場でハンマー投げの室伏広治選手や、陸上のウサイン・ボルト選手を見かけたエピソードを語った。「選手村には有名な人がたくさんいた。室伏さんは気さくに話しかけてくれる、男前な人だった」と語り、会場を盛り上げた。

パラリンピック競泳男子50m自由形で4位に入賞した山田は「自分の中では一番良いレースだったが、メダルの有無には大きな差がある。4年後には必ずメダルを取りたい」と再挑戦を誓った。

猶本が副学長らを表敬訪問 海外進出への意欲語る



笑顔を見せる猶本(中央左)と西嶋教授(中央右)

FIFA U-20女子ワールドカップジャパン2012に出場した猶本光(体専1年)が、指導に当たる西嶋尚彦教授(体育系)と共に10月22日、清水一彦副学長(総務・人事担当)らを表敬訪問し、銅メダル獲得を報告した。

「ヤングなでしこ」の愛称で親しまれるU-20女子チームは、8月から9月にかけてワールドカップに出場。3位決定戦でナイジェリアを破り、今大会初のメダルを獲得した。猶本は攻撃の要であるボランチとして全試合フル出場。メキシコ戦では豪快なミドルシュートを決めるなど全試合で2得点を挙げ、銅メダル獲得に貢献した。現在は本学に通いながら浦和レッズレディースに所属。「ポスト澤穂希」との呼び声も高く、未来のなでしこ候補として注目を集めている。

「海外選手の身体能力は衝撃的だった。(準決勝で)負けたのは悔しかったが、彼女たちのレベルに達しない世界で通用しないと感じた」と大会の感想を話していると言いつつ、海外進出への意欲もそそがれた。

本学での生活については「1学期は新しいことばかりで慣れるのが大変だった。通学時間には風間八宏氏の本を読んだりしている。つくばは夜が少し暗いけど、自然がたーさんあって本当にいい所と笑顔で話した。

秋季スポーツ・デー

本学でもスポーツの秋 親子ランナーに歓声あがる

第36回秋季スポーツ・デーが10月20、21日に学内18カ所の会場で行われた。2日間とも快晴で絶好のスポーツ日和となり、学生・教職員合わせて5546人が汗を流した。

サッカーや駅伝などの事前登録が必要な「正式種目」、スポーツ・デー学生委員会が主催する「学生委員会企画」、体育会所属の団体が体験教室や公開練習

などを行う「サークル企画」が行われた。正式種目の駅伝では、陸上競技場からスタートし、一の矢から医学エリアまでの距離をたすきでつないだ。ひときり周囲の応援を浴びたのが、同じ区間を子どもと一緒に走る職員姿だった。BAMIS推進室事務局の松田保保さんは男子部門に「AVE38」というチームで出場。小学校2年生の娘、吉納さんと3区間の2・53kmを力走した。松田さんは「毎年事務局で出場しているが、初めて娘と一緒に走ることができ、楽しかった。来年は優勝をねらいたい」と話した。

第36回スポーツ・デー学生委員会委員長の石井康平さん(社工3年)は、「多くの参加者にスポーツを楽しむんでもらえ、達成感を感じている」と話した。(12面に関連写真)

「本学でもスポーツの秋、親子ランナーに歓声あがる」

「本学でもスポーツの秋、親子ランナーに歓声あがる」

つくばマラソン 晩秋のつくばを走る 本学からも多数参加

第32回つくばマラソン(主催：本学・つくば市など)が11月25日に行われた。フルマラソンと10kmの部に、1万4144人が参加し、快晴の中、晩秋のつくば市内を駆け抜けた。

フルマラソンは本学をスタート、豊里交流センターで折り返し、陸上競技場へ戻るコース。沿道では市民が旗を振り、ランナーを応援する姿が見られた。

「本学からも多くの学生が参加した。体育専門学群開講の自由科目「つくばマラソン」の受講者は、例年通りおそろいのTシャツを着て参加、日頃の練習の成果を発揮した。

また、当日はオンライン動画配信サービス「Ustream」を用い、メイン会場である陸上競技場からライブ配信を行い、会場の熱気を伝えた。(12面に関連写真)

ライバルはいつも隣に

「ライバルはいつも隣に」

「ライバルはいつも隣に」

「ライバルはいつも隣に」

「ライバルはいつも隣に」



全日本駅伝3位の原動力となった双子ランナー

久馬 悠・萌 (体専1年)

「ライバルはいつも隣に」

顔

「顔」

「顔」

「顔」

「顔」

「青木塾」 新聞人・陸羯南を研究

作家の司馬遼太郎氏と青木彰名誉教授の遺志を継ぐ形で、本学卒業生らが明治の新聞人、陸羯南(1857~1907)の研究を進めている。これまで陸羯南が発刊した当時のクラフ誌などを復刻したほか、今年の学園祭では「司馬遼太郎と青木彰名誉教授展」を開催。その中で陸羯南の資料展示も行った。関係者は「将来、陸羯南やその関係者に関する小冊子をまとめたい」と話している。(筑波大学新聞代表・本学教授、福原直樹)



「司馬遼太郎と青木彰名誉教授展」の様子

自らがマスコミ志望者であった。この遺志を継ぐ形で本学卒業生ら約20人が04年に「陸羯南研究会」を立ち上げた。研究会はその後、「日本」付録のクラフ誌「日本画報」が富山県の民家にあるのを見つけた。関係資料の発掘を続け、「日本」の付録だった「明治中期分県地図」も復刻している。今年の学園祭ではこれらの資料を「日本」などを展示した。

研究会の代表世話人、高木宏治さん(社会科学部研究科出身)は、「陸羯南は社会現象を客観的に報じ現代ジャーナリストの先駆的存在だった。広範な国際的視野をもつ一方で『日本・日本人とは何か』も追究し続けており、その研究には今日的な意義がある」と話している。

カザフスタン日本学生フォーラム 外交樹立20周年を記念し開催

民族楽器の演奏も

「カザフスタン・日本学生フォーラム2012」が10月20~21日に大学会館ホールで開催された。このフォーラムは、日本とカザフスタンの外交関係樹立20周年を記念して行われた。同国に関心がある日本人や同国を始めた中央アジアからの留学生らが訪れた。

共和国日本大使の夏井重雄氏、駐日カザフスタン共和国大使館公使参事官のクルマンセイト・パトルハン氏、和光大学でカザフスタンの文化について研究している坂井弘紀氏がカザフスタンの過去と現在について講演を行った。

ハシ氏は「発展し続けるカザフスタンー日本との関係分野で他国との関わりを築いた橋本千紘さん(人文3

年)は、「ロシア語の授業で紹介され、参加した。ドングラフは、絃が本しかないのに音色が豊かで驚いた」と話した。

学生実行委員長の岩元絆美さん(国総4年)は「本学は中央アジアとのつながりが深い大学。今回のフォーラムでカザフ国立大学との交流が深まり、カザフスタンの研究者が集まることのできてよかった。カザフスタンの状況や留学についての情報も発信でき、これから留学する人への助けにもなったと思う」と語った。

しるくの大まちゃん No.37 7プレゼント by つく☆つく
もー。スマホは手袋はささないといけないのが面倒だわ。
ふーん。あつぞ
たまちゃん!
あした、ノートつけていませよ。
新商品 880円
新商品 210円



民族楽器で美しい音色を奏でる出演者

開学40周年イベント「筑誕」 筑波の「いま」を表現する THK筑波放送協会が主催

本学開学40周年記念イベント「筑誕」が11月3日に大学会館講堂で行われた。このイベントは、「筑波大学の「いま」を表現し、将来に残すことを目的に、2013年10月1日の本学開学40周年を学生の手で祝うもの。THK筑波放送協会が主催し、アカペラサークルDoo-woop、応援部WINS、斬桐舞、ときめき太鼓塾、落語研究会が出演した。

第一部では応援部WINSが迫力ある演技を披露し、落語研究会が「誕生日」をテーマに落語を披露した。また、THK筑波放送協会が「発見」と題し、ある分野で秀でた活動をしている本学生を取材し、プレゼンする企画が行われた。

第二部では、「発見」と題し、筑波大生で紹介された4人がステージに登場したり、映像で出演。それぞれの研究分野や研究過程を紹介した。ルービックキューブ研究会の佐島優さん(工シス4年)は、大会で日本記録を樹立したこともあるルービックキューブの腕前を披露。目隠しをした状態でルービックキューブを完成させると、会場からは歓声があがった。

その後、アカペラサークルDoo-woop、斬桐舞、ときめき太鼓塾がステージに登場、イベントの最後には、3団体がコラボレーションした2曲を披露した。最後の曲「風になりに」では第一部に登場した出演者もステージにあがり、アカペラ演奏、ダンスのコラボレーションで観客を魅了した。

出演する知り合いを見に来た上野修斗さん(情科1年)は「発見」と題した筑波大生で出演していたルービックキューブの佐島さんに圧倒された。つくばにもこんなすごい人がいるのだと思った」と話した。

「筑誕」統括を務めたTHK筑波放送協会の松橋翔太さん(同3年)は、「4月くらいから企画を進めていた。会場の都合でリハーサルがあまりできず不安もあったが、各団体のパワーが伝わるイベントだったと思う」と話した。(12面に関連写真)

課外活動団体リーダー研修会 団体間の交流を深める

学生支援室が主催する「課外活動団体リーダー研修会」が12月8~9日に行われる。これは、体育文化・芸術系の課外活動団体の次期リーダーや役員を対象に毎年開催される研修会。各団体の運営や活動をサポートすることが目的。本学生や教職員、紫峰会役員など毎年約250人が参加しており、現在参加者を募集している。

今年の研修会のテーマは「Innovation」。各団体の活動を振り返り、名称は「1」というクイズの答えである「ペン」から話題を広げ、いつのまにか漫画の話で盛り上がっている。クイズに向かう真剣な表情からは想像もできない、屈託のない笑顔が群を飾る。

同団体の活動は団体内にとどまらない。外部のクイズ大会の際には、他大学との交流もある。さらに、クイズを通して交流を深めることを目指して自分たちで大会を主催し、学外の人たちの交流を図っている。

「レイトン教授、「日の丸弁当」、「ナス科」といった一風変わった単語が「解答」として教室中に響き渡る。そして聞くえぐる正解、不正解を告げるブザー音……。この不思議な空間を作り出すのはクイズ研究会だ。

クイズ研究会はその名の通り、日々クイズを解き、研究を重ねている。クイズの出題者はひとり前に陣取り、早押しボタンを握り締める他の全会員(解答者と向き合う)。

そして例えば「腕と首周りが大きく露出するシャツは？」という問いに、解答者は間髪入れず「タンクトップ！」と答える。

と、会長の吉川修希さん(社工2年)は話す。その言葉通り、クイズの合間には「正答」から話題を広げ、話し込むこともしばしば。例えば「アールゼンチンなどの国々で使われている通貨単位」と、会長の吉川修希さん(社工2年)は話す。

「クイズはフテン語の「quis」(何)が語源であるとも言われている。「これは何？」と思うようなことは、気づかないだけで、私たちの周りに無数にある。すぐ近くにある無数の「quis」(何)が語源であるとも言われている。「これは何？」と思うようなことは、気づかないだけで、私たちの周りに無数にある。すぐ近くにある無数の「quis」(何)が語源であるとも言われている。

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答ははいかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。

クイズ研究会

クイズ研究会は、その名の通り、日々クイズを解き、研究を重ねている。クイズの出題者はひとり前に陣取り、早押しボタンを握り締める他の全会員(解答者と向き合う)。

そして例えば「腕と首周りが大きく露出するシャツは？」という問いに、解答者は間髪入れず「タンクトップ！」と答える。

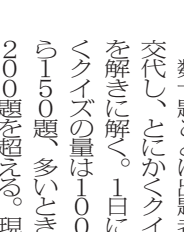
と、会長の吉川修希さん(社工2年)は話す。その言葉通り、クイズの合間には「正答」から話題を広げ、話し込むこともしばしば。例えば「アールゼンチンなどの国々で使われている通貨単位」と、会長の吉川修希さん(社工2年)は話す。

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答ははいかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答ははいかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答ははいかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答ははいかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。



クイズがつくる解けない絆

数十題ごとに問題を出題者を交代し、とにかくクイズを解きに解く。1日に解くクイズの量は100から150題、多いときは200題を超える。現在会員は9人だが、OBも多く訪れ、和気あいあい

分野から出題される。そんなクイズ好きの同団体だが、単にクイズを解くことが活動目的ではない。その真の目的は「クイズを通して人との交流や知識を深め、日常の生活に潤いを与えること」。

同団体の活動は団体内にとどまらない。外部のクイズ大会の際には、他大学との交流もある。さらに、クイズを通して交流を深めることを目指して自分たちで大会を主催し、学外の人たちの交流を図っている。

最後に吉川さんに「クイズの魅力は」と質問してみた。いつものように即答ははいかず、困ったように笑う会長に「それはしっかりと答えよう」という会員からの鋭いツッコミは親密な証。すると今度は優しく笑い「正解したときの嬉しさが魅力」と話した。

Who's Who?

つくば市長賞など多数受賞

たかと 本多 隆利 さん (生物4年)



彼の優しい笑みは、仲間と共に未来を見据える

「好きなことに巡りあわせてくれた人、支えてくれる人たちに好きなことで恩返しをしたい」と真摯な表情で語るのは本多隆利さん(生物4年)。8月末に、全国の大学生が研究発表を行うリサーチフェスタ2012で最優秀賞であるつくば市長賞を受賞した。

受賞したのは「ショウジョウバエを用いたヒト精神疾患の遺伝学的研究」。今まで統合失調症の原因とみられる遺伝子は発見されていたが、その遺伝子が脳の機能に影響を及ぼすメカニズムは解明されていなかった。本多さんは新たにショウジョウバエを用いた実験

で、その遺伝子の働きを理解する糸口を提示・説明し、高評価を受けた。「好きな」科学に巡りあわせてくれたのは、高校の理科教師の叔父だ。「小さなころから叔父に顕微鏡や天体望遠鏡を借り、川の中の微生物や星を観察するうちに、科学が好きになった」と振り返る。天体望遠鏡をのぞいて、広大な宇宙に想像を膨らませ、顕微鏡をのぞき、身近にも知らないものがあると感嘆した。「人が知らないことに迫りたいと、小さいころから思っていた」。着ちかいた雰囲気の本多さんも科学の話になると子供のようだった。科学の中でも天文学や生物学に興味があり、高校生のとき、生物学を中心に研究し始めた。

つながりで築く科学 「好きなこと」で恩返し

団研究の意義を学んだ。今まで一人の実験が多かったが、高校で生物部に入ると一人ではできないことも増えた。「アイデアがあっても知識や技術が足りず、顧問や大学の先生にアドバイスをもらった。生物の飼育も一人ではできず、部員に助けもらった。高校生から始めた書虫の研究では、高校生を対象とした国内で最も伝統と権威のある「日本学生科学賞」で、3番目にあたる環境大臣賞を受賞した。「仲間と受賞の喜びを分かち合えた」。

顧問の勧めもあり、本学に入学を決めた。入学後は1年次から研究を始め、3年の夏にはウィーンに留学した。学生であるが、研究所に雇用され、一研究者として扱われた。ウィーンバイオセンターの研究員に何度も質問し、世界各国の留学仲間と共同生活する中で自分を磨いた。初めは英語で「自分らしき」が表現できず、とまどうことも。しかし共に生活する中で、「研究が好き」という志が同じだと気づいた。「国

や研究分野の壁は超えられる。世界中の同世代の同志に会えたことが大きな収穫だ」と笑う。「支えてくれる」のは科学関係者だけではない。本多さんは科学をわかりやすく伝えることを目指しており、その一環で芸術専門学群の学生と協力し、研究内容を絵にするなどの活動をしてきた。「誰にでも科学をわかりやすく伝えることは、これからの研究者の責任だと思っ」と強く語る。

卒業後は大学院に進学するつもりだ。「まずは博士号を取る。面白く、重要な課題に常に挑み続けたい」。故郷は坂本龍馬ゆかりの地、長崎。本多さんは龍馬の大ファンだ。ノートパソコンに貼られた龍馬のシールが光る。「人と人、アイデアとアイデアを結びつきたい」。革新的なアイデアや行動力で日本をあとと言わせた龍馬のように、本多さんも世界を股にかけて時代を切り開いて行きたい。 (中島佳奈 11人文学類2年)

編集後記

今年の執行代は個性的な顔ぶれがそろった。自称壺売り吟遊詩人の副編集長N島。男の娘な取材人N宮。ゲバ棒を携えてパソコンと会話するN島。学園祭に魅せられた接客系女子K。心のない発言がチャームポイントのU。留学生と都会の荒波に飛び込むO。デニムとベトナムマスターのK。小動物系編入生S。微笑みと新聞の使者T。次回からはレッドファルの香り漂う編集室からより素敵な紙面をお届けできることでしょうか。乞うご期待! (編集長・松本果奈 11人文3年)

次号は

2月4日(月)

発行予定です

ときめき太鼓塾 10周年記念公演鼓舞



粋な音色が場内に響きわたる

5面へ

第36回秋季スポーツ・デー



秋晴れの空のもと、仲間と汗を流した

9面へ

第32回つくばマラソン



晩秋のつくばを、ランナーは一斉にスタートした

9面へ

筑波大学開学40周年記念プレイベント筑誕



華やかなダンスで会場を盛り上げるWINS

11面へ

学芸

スポーツ

スポーツ

学生生活